

だらけきった鎮守府

ティン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

平凡な人生を送っていた主人公が何故かワンピースの青キジになって艦これの世界に転生してダラけながらも艦娘達と仲良くなる話。

「あ、こんな所に悩殺姉ちゃんスーパーポイン。今夜ヒマ？」

真面目にやれ！コラア！！

目次

第1話	ROMANCE	DAWN	
海兵の夜明け			1
第2話	”脅威”		14

第1話 ROMANCE DAWN —海兵の夜明け—

「ん?」

夢?

にしちやあ……リアルだなオイ。青い空に、輝く海。浜辺………。おかしなこともあるもんだ。布団に入って寝たつてのまにか浜辺にワープか?ゲームのチートじゃねえんだから……。

「んん?」

立ち上がって更に違和感。

……
視点が妙にたけーな……。服も見慣れねーものだし鏡でもあれば確認出来そうだが
……

その時近場で爆発音が響く。

かなりの轟音だった筈だが俺はちよつと顔をしかめる位で終わった。(あくまで個人見解だが)

「なんだなんだ?」

どうやら轟音は島の反対側から聞こえてきたようだ。

浜辺は反対側まで続いているらしく沿って行けば直ぐに着きそうだが……

と、ここであるものが目に付いた。チャリンコだ。砂浜にかなりの存在感を有して其処にいる。俺はそのチャリンコに見覚えがあつた。通称「青チャリ」と呼ばれるワンピース内の海軍元大将 青キジのチャリだ。

段々だが俺が誰になったのか察し始めた。見慣れない衣服に異常に高い視点、そして……ああ、やっぱりそうだ額に青色の目隠しがある。

俺は 海軍大将時代の青キジになっている……。

「おーおー。ありゃあ艦娘だな。」

身体の事は後回しに島の反対側まで回りチャリと同じく砂浜に落ちていた小型バツグから双眼鏡を取り出し観察する。

にしても身体はクザンのくせに世界は艦これとか随分とご都合主義だなオイ。そんなことはどうでもいいな。この局面を乗り切れれば考える時間は山程ある。

さて、友軍編成はざつと見たあたり

阿武隈改二、睦月改二、如月改二、朝潮改二丁、霞改二、荒潮改二か。恐らく遠征だろう。だが敵艦と対峙する彼女たちの顔には恐怖が読み取れた。

遠征任務光景を見たことがないから言えた事じゃあ無いがいつもとは違うヤバイ奴と会敵でもしたのか？と双眼鏡を横にずらして行くとその疑問は納得に変わった。

あの禍々しい偽装は他でもない戦艦棲姫いや片角だから戦艦水鬼だな。どちらにし

ても彼女達には恐怖でしかないだろう。

「なんて事……！皆！奮起して！！ここで沈む時じゃないわ！！」

今日は全くもってツイてない。そう思ったわ。遠征中に鬼しかも戦艦水鬼に出くわすなんて……私以外の皆は大発のみ、かという私も大発と少しばかりの魚雷のみ……。

ああは言ったもののこの装備じゃあ背中を向けて一目散に逃げきるしかない！！

その数秒後に水鬼に砲撃のような攻撃があったの……小さな小島から……。

「…………だれ？」

「……………？」

「あ、あれって…………まさか！」

「あ……………」

「なんの…………冗談ですか？」

「オノレ…………！」

小島の浜辺、その視認できる場所に腕をクロスさせた気だるそうな表情で白と青基調の服装の男が居た。

その男からの攻撃によりキレた水鬼が男に大将を切り替え砲撃を繰り出した。

「あゝ。お嬢ちゃん達ゝ。早く逃げなよ。面倒くさいが俺が受け持つから。」

俺がそう言うのと彼女たちは直ぐに反転し帰港を開始した。しかし先程の声で艦娘達
が撤退し始めたのに気づいたのか水鬼は再び艦娘達に砲を向ける……

「アイス^{ブロック}塊”^{バルチザン}両棘矛”」

初めての实战だつてのに全くもって能力の暴走がない。体が覚えているのか？
先程の両棘矛も全て奴の禍々しい偽装に当たり見事に煙を上げた。

「オノレ!!イマイマシイガラクタメツ!!」

水鬼は懲りもなくこちらに向けて砲を構える。
能力がキチンと出せるなら此奴も難なく出せるか……？

ちやぶ……

海水に手を入れ言う。

”^{アイスエイジ}氷河世界”

見える範囲全てが氷の世界へと変化した。ある程度加減したからか周辺諸島までは氷漬けにはなっていない。

水鬼は艀装を氷漬けにされオロオロしている。

「ナツ!?ア?」

なんだこの可愛い表情は。ゲーム内じゃあ表情なんてあまり無かったし新鮮ちやあ新鮮かな。

俺はゆったりとしかし確実に凍り付いた海を水鬼に向かって歩く。俺が近づく毎に水鬼は後退りしようとするも足首が凍り付いて動けないようだ。

便利だよなあ。

「あらら……悩殺姉ちゃんスーパーボイン。今夜ヒマ？」

「……………ツ!!ハナレロオ!!」

バギインと嫌な音を立てて俺の身体が奴の裏拳で吹っ飛んだ。いやーなんていうかね自分の身体が吹っ飛ぶところが見れるなんてレアだよな。

なんでそんなに冷静かって?自然系ロキアは覇気武装じゃなければダメージも無いしオマケに修復できるスグレモノなんだよね。

「んアア。ひどい事するじゃないの……」

「バ……バケモノメ……ヨ、ヨルナツ!!ヤ、ヤメロ!!」

化け物……ね。

「アイスタイム」

「アンタらに言われたらお終いだな、そりゃあ。さて……」

バギイン、ズガン!!

海に沈んでまた戦う日々に戻るならここで何もわからないまま粉々になった方がい
いだろう……。

んじゃあ、ま。彼女達でも追いかけるかね……。鎮守府にいければ今のこの世界の状
況を聞けるだろうしな。

「よつと……おつとつと。」

俺は浜辺に打ち上げられていたチャリを立て直し漕ぎ始める。期待に胸を躍らせながら。

(後で覇気の練習もしとくべきかもな……)

第2話 ”脅威”

「あらら。」

先程助けた6人はしばらく行くとまるで待っていたかの様にその場に待機していた。

「オタクら、なんでこんなトコに待機してるんだ？海の天候は気ままだ。さっきの奴等もいつ出るかわからんぞ？」

「助けてもらった手前見捨てる選択は取れなかったにやし……」
「阿武隈さんに無理して頼んだのは誰だったかしらねえ？」

「霞！言い過ぎです。」

「あらあら。やっぱり本物なのね？」

「……………」

「辺りの安全確保が出来たので睦月ちゃんの提案を飲んだまです。とりあえず鎮守府に案内します。」

彼女達からの反応は各々だったが睦月はどうやら敵勢地だというのに旗艦である阿武隈に無理言つて待機していたらしい。

だとしてもだ俺が水鬼との戦いでやられる又はどちらも死ぬという可能性は考えなかつたのか？

「まー…其奴は有難いんだが、チャリだと跡がついちまうんだが……」

悪魔の実の能力者で海を渡れるのはレアケースだがこのチャリ移動は海の表面を凍らせながら走る為どうしても追跡されやすくなる。

もともと鎮守府埠頭から近海を氷漬けにすれば奴等は出てこれなくなるが彼女達が出撃できなくなるのでNGだ。

「大丈夫です。先程私たちの提督に話を通して小舟を手配しましたから！」

どうやら阿武隈は俺が思っている以上に色々な事柄を見ているようだ。……お言葉に甘えるとしますかね。

しばらくすると鎮守府があるだろう方面から船を伴った護衛艦隊がやってきた。遠征部隊の阿武隈達と俺は船に乗り鎮守府へと向かうことになった。

「改めてありがとうございます!! 貴方のおかげで無事にあの危機を回避することができました。」

「いや、まー。なんてゆーかね。可愛い女の子が襲われてたから守ったまでだからそんな感謝いらねーよ。」

「あの……青キジさん? ですよね?」

「んん?なんで知ってたんだ?」

阿武隈達それに護衛に来た子達もそうだが皆青キジを知っている。それはこの世界にも漫画ワンピースは存在するようで鎮守府にもファンがいるらしい。(秋雲がワンピースの同人誌を一時期描いていたらしいが聞くのはよそう。)

「なるほど……別次元の世界……ね。」

「驚きとか無いわけ？いきなり違う価値観の世界に飛ばされたら混乱すると思うけど。」

「海軍はこつちでも存在してるんだろ？なら俺のやる事は正義を成す事……だな。ま、敵の対象が違うぶん全員殺さなきゃあならんのが心苦しいがな。」

今気づいたんだがやはり身体が大將時代だから先に起こる決闘などは記憶には無かった（自分の中にはちやんとあるが…）

と談笑していると船が停止し外から鎮守府に到着した旨が伝えられる。阿武隈達の後ろに付いて埠頭へと足を運ぶ。

と、外の景色が見えた瞬間眼前に違う十二かが見えた。

「アイスサーベル！」

咄嗟に船に設置されていた手摺を凍らせ勢いよくナニかと自らの間に滑り込ませた。

キーン！

派手な金属が鳴り響く。どうやら刀のようだ形からして天龍型の……やはりそうだ、眼帯に頭の両端に耳の様な艤装が浮遊している。天龍だ。

彼女はニヤリと笑うと再び刀を振り上げたがそれは怒号によってストップした。

「やめなさい!!天龍!!」

ビリビリと空気が振動する。天龍は興が削がれた様に呆れ顔で其方に振り返る。

其処には白い軍服と軍帽を被った女性と赤城、大淀がいた。

「なんだよ提督。提督だろ?この男は脅威になるつて言ったのは。」

「私は彼との接し方次第では脅威になり得るかもしれないと言っただけけれど……」

「天龍さん。貴女は少し話を聞いて考えてから動いてもらいたいんですが……」

どうやらこの天龍は喧嘩つばやいようだ。俺は船の手摺を勝手に折ってしまった事を謝罪する。

「あー……スマン。手摺を折っちゃまって……金が共通だったなら弁償出来たんだが……」

「謝るのはこちらです。申し訳ありません……。彼女には悪気は無かったので許してく

ださい。ほら！天龍も謝りなさい。」

「嫌なこった。」

「ふぎけやがつてえ!! (c.v. 玄田○章)」

(筋肉式説教)

「す……すび……すびませんでした……」

「お、おう。」

「とりあえず執務室に案内をします。そこで経緯など聞かせていただきますね？」
「そうしてもらえると助かる。」

「誰かこのタンコブを入渠させてくれる？」

「じゃあ私が連れて行くわあ〜？ねえ？天龍ちゃん。頭を冷やしましょうね〜」

天龍がヤバイの目の龍田に連れて行かれた。天龍の方は……放心してるな。南無。

「ほら皆も見世物じゃ無いわよ！各自戻りなさい！！………クザン大将。こちらです。」

「こつちじゃあ、大将じゃねえんだがなあ……」

「同じ海軍ですし変わりませんよ。」

こうして俺は一波乱あったものの鎮守府構内に足を踏み込んだ。